雅楽だより

《目次》

●「東儀俊美先生を送る会」 1
●熟達の人　東儀俊美先輩を悼む　芝　祐靖 2
●生涯現役　豊　英秋 3
●東儀俊美先生を悼む　小野功龍 3
●俊美先生を想う　福岡三朗 3
●飄々として、　東　康弘 4
●挿頭花考　東儀俊美 4
●横笛唱歌考 3　芝　祐靖 6
●「北陸雅楽大会」残吹で大合奏 8
●東日本大震災復興へ向けて 9
●復興への願いを込めて　伊藤えり 9
●文化交流使　真鍋尚之 10
●宮中御神楽の図　中村裕之 10
●情報欄 11

第26号　2011（平成23）年7月
発行　雅楽協議会

東儀俊美先生を送る会

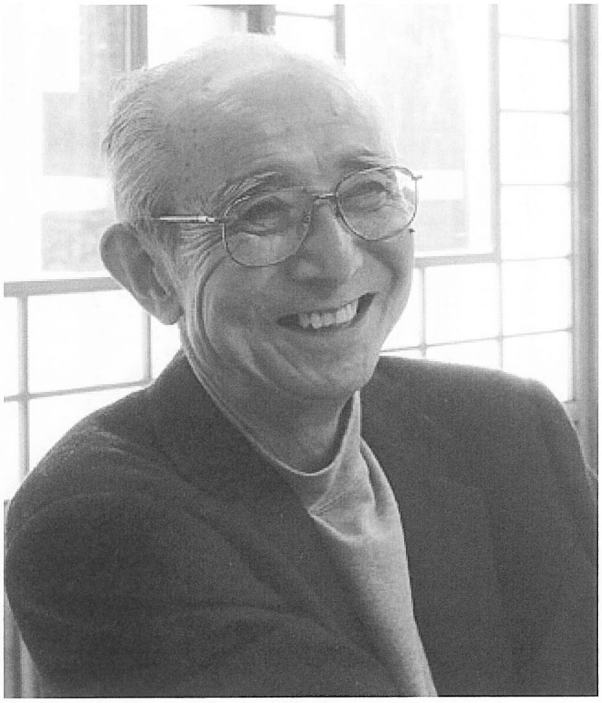
舞楽の演奏の中で焼香

5月21日青山斎場

元宮内庁式部職楽部首席楽長・日本芸術院会員で雅楽協議会の設立準備より発起人として雅楽の発展の為にご尽力いただいた東儀俊美先生が、4月20日病気療養中のところ81歳で急逝された。

「東儀俊美先生を送る会」が、5月21日午後1時より、青山斎場（東京）で各界より多くの方々の参列のもと、東儀先生がオーケストラ用に編曲された「日本の四季」「60年の調べ」「金剛石」「富士山」が流れる中、実行委員長、豊英秋・前宮内庁式部職楽部首席楽長のもとすすめられた。

まず豊英秋実行委員長の主文が奏上され、宮内庁式部職楽部よりご霊前に盤渉調音取、越殿楽と催馬楽「大空」（皇太子殿下御成婚時、皇太子殿下の御歌「大空に舞ひたつ鶴の群眺む　幼な日よりのわが夢かなふ」に東儀先生が曲を付けられたもの）が献じられた。



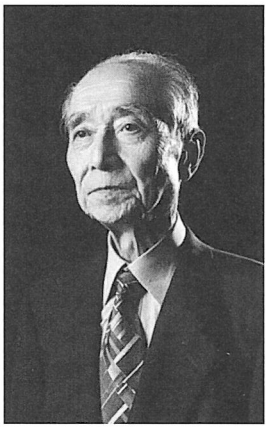
談笑される東儀俊美先生

続いて弔辞が安斎省吾 宮内庁式部職楽部首席楽長、三浦朱門　日本芸術院院長（代読・常磐津英寿日本芸術院会員）、薗麗子雅楽道友会会長より奉読され、各界からの弔辞、弔電の紹介と続き、謝辞が豊英秋実行委員長と、東儀俊美先生の奥様で喪主の東儀道子氏より述べられた。

参列者の焼香に移り、雅楽道友会と雅楽翠篁会による舞楽（胡飲酒、落蹲、青海波、右方の抜頭）が演奏され、途中司会者より「舞楽　陵王を東儀先生に届けますので、演奏に協力頂ける方は御準備下さい。」との呼びかけで多くの方が一緒に舞楽陵王を演奏し、東儀俊美先生を偲ばれた。舞人は喪主である東儀道子様の希望により宮内庁式部職楽部の岩波孝昌楽師が務められた。鞨鼓は豊英秋実行委員長が務められた。

最後に送る会事務局の福岡三朗（NPO）雅楽道友会理事が閉会の辞を述べ、「東儀俊美先生を送る会」を締めくくられた。

「東儀俊美先生を送る会」 5月21日　青山斎場



東儀俊美先生

東儀俊美先生　略歴

昭和4（1929）年9月14日、秦河勝（はたのかわかつ）を祖とする天王寺方楽家、東儀俊輔氏の長男として東京で生まれる。
昭和16（1941）年宮内庁楽部に入部
同24（1949）年、楽師
平成3年（1991）年、楽長
雅楽道友会　顧問に就任
同5（1993）年より首席楽長
同8（1996）年、退官
同11（1999）年、双光旭日章を受章
同12（2000）年日本芸術院会員に任命
同14（2002）年、雅楽翠篁会　会長就任
同23（2011）年4月20日、永眠
81年7ヶ月

主な作曲・作舞・大嘗祭後の饗宴「悠紀風俗舞歌」、皇太子御成婚を祝して催馬楽「大空」、
主な著作・『雅楽神韻』『雅楽縹渺』
復元舞・蘭陵王「嗔序」「荒序」／採桑老
雅楽作曲・作舞・成田山新勝寺「祈り」「白い花」、西宮住吉神社「住吉の舞」他

熟達の人
東儀俊美先輩の逝去を悼む

芝　祐靖

雅楽界の巨星が、また一つ消えました。本当に寂しい限りです。

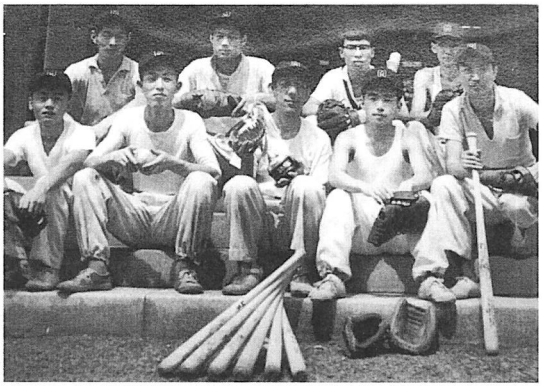
思い出してみますと俊美先輩には、若造のころより老躯の今日まで、なにかとお世話になりっぱなしでした。恩返しも出来ないままに……慙愧に堪えません。

昭和31年春、私が楽部楽生を卒業して、初めて御陵祭典奏楽に行ったのは、奈良県畝傍にある「神武天皇御陵」でした。その時の笙奏者は確か林廣一先生、篳篥奏者が東儀俊美先輩でした。御陵までの道順や、式典の作法もわからないことだらけでしたので、俊美先輩とは東京駅で待ち合わせて、御陵まで連れて行ってもらいました。奏楽曲は五常楽急と雞徳でしたので、何とか間違えずに演奏できました。

＝この写真は、御陵入口で撮ってもらったものです。写真右・東儀俊美先輩＝

俊美先輩は格好よくハンサムですね。

昭和37年ころでしたか宮内庁で部局対抗のソフトボール大会が、旧本丸の広場で昼休みに行われました。楽部の選手は、投手・豊雄秋（敬称略）、捕手・岩波滋、一塁・東儀勝、二塁・東儀俊美、三塁・芝祐靖、遊撃・多忠麿、左翼・薗隆博、中堅・山田清彦、右翼・上明彦と記憶しています。初めのうちは、なかなか勝てなかったのですが、4年後ぐらいに優勝しました。



＝右写真は、優勝したときの記念撮影です＝

俊美先輩はローボールヒッターで、鋭い打球を放っていました。

（前列右より（敬称略）東儀俊美、薗隆博、豊雄秋、多忠麿、上明彦、後列右より山田清彦、岩波滋、東儀勝、芝祐靖）

同じころ、私の給料は月額1万円たらずで、親子4人の生活は苦しいものでした。その様子を見兼ねたのでしょうか、俊美先輩は、外の仕事を探してくれました。その中の一つ。千駄ヶ谷の東京都体育館で、ボリショイサーカスが催され、バンドの一員に推挙してくれました。バンドのメンバーは日本人ですが指揮者はごっついロシア人でした。

曲目はほとんどクラシック音楽でしたが、第一曲目はチャイコフスキーの「眠れる森の美女」のワルツ。そこにピッコロで信号音のようなものをピピーピーピーと吹かされました。これはソ連が人工衛星スプートニク号の打上げに成功したことを、あらためて日本の観衆にアピールしたのでしょう。

サーカスの公演は一ヶ月ほど続きましたが、思わぬ高額のバイト料を戴き、わが家は大喜びでした。

俊美先輩には、本当に色々の仕事をさせて戴き、感謝いたしております。

俊美先輩は平成5年、宮内庁楽部首席楽長にご就任され平成8年3月に定年退職されましたが、ご退職後も雅楽への熱き思いは冷める事なく、民間の雅楽会を指導するかたわら、廃絶舞楽の復興研究を重ねられました。平成19年には、国立劇場の委嘱を受けて、究極の一人舞「採桑老」を国立劇場雅楽公演「楽家の伝承をたずねて」で舞われました。

また平成21年には、舞楽・蘭陵王の廃絶部分「嗔序（しんじょ）」と「荒序（こうじょ）」を、古舞譜を解読して復興され、蘭陵王全曲《小乱声（こらんじょう）・陵王乱声（りょうおうらんじょうさえずり）・囀（しんじょ）・嗔序・沙陀調音取（さだちょうのねとり）・荒序（こうじょ）・

陵王当曲・安摩乱声》を宮内庁楽部楽師の岩波孝昌氏（前半）大窪康夫氏（後半）に指導されて演奏しました。

左舞の名人、薗広茂先生の薫陶を受けられた俊美先輩は、特に舞の道を大切になさっておられました。採桑老を舞いつつ雅楽人生の終局を迎えられましたことは、まことに偉大であり、幸せであったと申せましょう。

今頃は西方浄土で、先達と楽しく舞っておられることでしょう。

ご冥福をお祈り申し上げます。

生涯現役

前宮内庁式部職楽部首席楽長　豊　英秋

授業のベルが鳴り、待つこと5分。おしゃれなツィードのジャケット、チョット目立つチョウネク（タイ）、小脇にヴァイオリンを抱え、口にはパイプ、エキゾチックな顔立ち、キリッとした立ち姿で、スーッと部屋に入って来られ、開口一番「君がユウシュウ（雄秋）さんの息子か」「ハイ」「音楽は？」「いえ、あんまり」「そうだよな、男で音楽が好きなんて気持ち悪いよなあ」。これが俊美先生との出会いであった。（昭和31（1956）年、12歳。父の後を継ぎ楽部楽生となる）

いよいよ練習が始まる。「弾いてごらん」。ヴァイオリンをあごに、右手に弓を持ち「ギッ、ギ、ギギーー」これが55年に及ぶ音楽生活の第一声。

先生、ニコッと笑って「君、なかなかいいよ」うれしかった。（それは先生の優しい心づかい）

授業が終わり一言。「音楽って音が学ぶって書かないよな。楽しくだろ。そう楽しくいこう。」子ども心に先生のやさしさが身にしみた。そんな先生からヴァイオリンの手ほどきを受けたことがずっと自慢の一つであった。

それから10年。私もすでに楽師。雅楽では、先生と唯一「楽箏」が共通の楽器であった。先生の箏は絶妙で、管方に合わせながらも、全体の演奏をリードしていく。ある日スタジオでの録音の時、私が指を絃に乗せる音が気になって、指を浮かせたまま、弾いているのを見て、先生から「指を絃に乗せるカサッという音も、音楽だよ」と指摘された。間の取り方、音の強さ。近代の箏の奏法を作り上げたのは、先生であった。そんな先生の主箏の背中を見ながら助箏で、長きに渡り勉強させていただいた。（これも自慢の一つ）

それから、先生はいつも自然体で、分からないことがあるといとも簡単に「それは僕にはわからない」といわれる。

又、日頃から「楽師は、親・兄弟よりも長く顔を合わせている家族みたいなもんだよ」とおっしゃられ、実際　我々楽師には身内のように接して下さった。

俊美先生、誠にありがとうございました。家族のように見守ってくださった先生によそよそしくお悔やみは申し上げられません。唯、先生の楽人魂を胸に、私も現役であり続けたいと願っております。

東儀俊美先生を悼む

天王寺楽所　雅亮会楽頭　小野　功龍

東儀俊美先生が、四天王寺を訪ねられ聖霊会舞楽大法要を御拝観になられたのは、平成14（2002）年のことでありました。秦姓東儀氏の御末裔である先生はかねてより聖霊会の拝観を望んでおられたようですが、お役所でのお仕事の御繁用やまして首席楽長になられ又芸術院会員としての公私にわたるお仕事の為に、なかなか意のままにならず過ごされてこられたようです。後日先生から御懇篤なお便りをちょうだい致しました。その書簡には聖霊会に行われる天王寺舞楽は、聖徳太子への信仰と讃仰を基にこれを表す伽藍とこれをとりまく寺内町の人々とその町並み、そうした環境の中に育まれてきたのであり、それは宮中の祭事と鑑賞を中心として展開してきた宮内庁の雅楽の歴史とは違ったもう一つ伝承形態を示すものである。従って今後ともそのことを大切にして天王寺舞楽の伝統を守っていってほしいとの意味が、あの先生独特の流麗な文章で述べられてありました。

宮内庁の伶人であられながらその故郷の天王寺舞楽にこれほどの篤い想いを持っていて下さったことに大きな感動を覚えました。

その後も四天王寺で毎夏催される「かがりの舞楽」にもお運びくださり、又平成21（2009）年には例年朝日新聞社と共催します「雅楽ゼミナール」に講師としてお迎えし「天王寺楽所と明治選定譜」と題して選定譜が成立する迄の興味深いお話しをうかがいました。

先生はまだまだお元気で御活躍くださることと思っておりましたのに切なく寂しい想いを致しております。願うらくは彼土より我々に御照覧賜らんことを念じ上げております。

俊美先生を想う

（NPO）雅楽道友会理事　福岡　三朗

雅楽道友会は先生より平成3（1991）年から20年に渡り、言葉では言い尽くせぬ恩頼を賜りました。

私が俊美先生という存在を初めて知ったのは、30年以上も前のことで、その時のことは今でもよく覚えています。地方で行われた8人だけの越天楽、『何だ、この箏は！』弾くたびに楽器が前後に大きく動くほど強烈で、表現は変かも知れませんが、管と絃が全力で、しかも楽しげに戦っているように見えました。箏は管の添え物だと勝手に思いこんでいたのですが、主役に躍り出ようとしている。管もそれに負けじ魂で思いっきり吹かざるを得ない。演奏中にも拘わらずプログラムに目を落とすと箏・東儀俊美とあり、本物というのは、こんなにも凄いのか・・後の曲の記憶が全く無い程の衝撃でした。先生からは言葉でも「舞が揃っているとか音が合っているとかは本来あまり大きな問題では無いんだよ」と御指導頂きましたが、どうやら「先ず

は全力で行う事。それが合っていれば更に良い」ということだったようです。

そんな先生の最後の箏は昨年の雅楽道友会第二回演奏会「東儀俊美半寿の楽舞」での「伊勢の海」でした。13人の歌に絃が一面、私は恐れ多くも琵琶を担当し全力で戦いました。しかし、先生もなりふりかまわず来ると想像していたのですが、弾きは強いが決して歌を壊す感じではなく優しさがありました。三十年以上思い続けた「全力でのぶつかり合い」ですが「あれ、違うのかな？」と思い演奏後に先生に尋ねたところ、「きっと僕が変わっちゃったんだよ。すまなかったね」とのこと。「とんでもありません」と失礼な質問を陳謝しましたが、質問の答えは未だ見つかっていません。

私達残された者は、先生や諸先輩方から教わった全てを次の世代に伝えること。それが使命であり恩返しであると肝に銘じ励みたいと思います。俊美先生、本当にありがとうございました。

飄々として、

雅楽翠篁会代表　東　康弘

十年前になりますか、現在の練習場が出来て、会の名前を翠篁会から雅楽翠篁会に改名することになりました。そして会長を新たに俊美先生お願い出来ないかと、一泊二日の私達の練習会に来ていただいた折、あまり飲まれない俊美先生と二人、近くの呑み屋さんで夕食を取ることになり、何時もですとコップ何杯かの私のお酒に先生はお猪口一杯でお付き合い、さて、今夜はまだ飲まないうちに、どのようにお話をすればいいだろうと不安な気持ちで切り出してみますと、「いいよ」とあまりにもあっさりと軽く、飄々として返事をいただきました。

えっと驚きながら本当にいいのですかと再度確認、「自分の名前が会長として役に立つのなら存分に使いなさい」と云っていただき、雅楽翠篁会の会長の誕生となりました。

その後は雅楽の話は勿論ですが、その時々の世上の話題や先生のお住まいの横須賀辺りの様子などを楽しそうに、何時もの如く酒の肴をお話で充たしていただきました。

お稽古の時は少し厳しく、普段は飄々として、雅楽の仙人である俊美先生、仙人なのでまたどこかで、

合掌

東儀俊美先生

天上の舞　宇宙の楽　挿頭花考

元宮内庁楽部首席楽長・日本芸術院会員　東儀　俊美

挿頭花。かざしと読む。現在では国風歌舞のなかの「東遊」、舞楽では蛮絵装束を用いる平舞の何曲かと、童舞の「迦陵頻・胡蝶」の天冠に付ける造花のことである。今回はこの挿頭花について考えてみよう。

先ず例によって三大楽書からスタートする。

（一）

『続教訓鈔』（1322年）と『體源鈔』（1512年）には殆ど同じことが書かれている。現代と対比するため少し長いが『続教訓鈔』のほうを書いてみる。

「舞人が冠を付けるときは必ず挿頭花の花を挿すべきである。そしてたとえ造花であってもその季節の花を挿すべきである。昔、もろこしの鵲と言う舞人は冠に櫻を挿したとか。興福寺の常楽会は2月（旧暦）なので左は櫻、右は款冬（ふきの別名）の造花。法隆寺聖霊会も同じである。氷室御祭の日は、（略）正門の前を過ぎるとき南岸に生えている、すまい草（ひるがお）を夫々に採って挿頭花にする。春日若宮御祭十烈に舞人は櫻、陪従は款冬、使は藤を左に挿すが、いずれも造花で、月が違っても同じ花である。或る記録によれば、総て陪従は柳を挿し、祭使は藤を挿すとか。相撲節会は7月なので左桔梗、右女郎花の生花。童舞は、左櫻、右は山吹（略）」（現代語訳筆者）。この外にも、杉とか竹、菖蒲をはじめ、すすき、卯の花なども挿頭花に挿せるのかしら、と疑ってしまうような花が書いてあるのだが、この時代は原則として生花を使ったらしい。生花が無いときのみ造花で代用したのだろう。

『楽家録』（1690年）の時代になると「作り花を用いる類」という項目はあるが、挿頭花に関しての記事は非常にあっさりしていてあまり参考にならない。この時代になると挿頭花は総て造花になっているらしい。

現代はどうかと言うと、冠を用いても挿頭花を付けない舞が多くなっている。冠を用いるのは蛮絵装束の場合に限られる。何時からこうなったのか判然としないのだが、現在左舞では「春庭楽・桃梨花・喜春楽」だけに挿頭花を挿ける。例外として国風歌舞の「東遊」では舞人も歌方も挿頭花をつけるが、舞人は向かって右から左、歌方は左から右に見えるように付け、花の色も菊の場合なら舞人は黄菊、歌方は白菊と言うように違えている。挿頭花の種類も少なく、櫻・菊・山吹など数種類しかない。

（二）

平安の昔、挿頭花はどんな花を使い、それを人々はどう見ていたのだろうか。挿頭花についての専門的な記録が全然無いので（少なくとも私はそのような記録を見たことが無い）はっきりしたことは言えないのだが。先ず紫式部の『源氏物語』（11世紀初頭）から、舞楽の描写としてあまりに有名な「紅葉賀」を見てみよう。

「（略）木だかき紅葉のかげに、四十人の垣代、いひ知らず吹立てたるものゝ音どもにあひたる松風、「まことの深山おろし」と聞えて吹まよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたる様、いと、おそろしきまで見ゆ。かざしの紅葉、いたう散り透きて、顔のにほひに、けおされたる心ちすれば、御前なる菊を折りて、左大将さしかへ給ふ。」

この文から察すると、挿頭花は実物の花で種類は決まっていなかったと思われる。

もう一つ、同時代に書かれた清少納言の『枕草子』から。「加茂の臨時の祭、空の曇り、さむげなるに、雪すこしうち散りて、挿頭花の花、青摺などにかかりたる、（略）受領などなるは目もとまらずにくげなるも、藤の花にかくれたるほどはおかし。なほ過ぎぬるかたを見送るに、陪従のしなおくれたる、柳に挿頭の山吹わりなく見ゆれど、泥障いとたかう打ち鳴らして、『加茂の社のゆうだすき』とうたひたるは、いとおかし。」

これは加茂の臨時の祭の時、「東遊」の奉納の為、馬に乗った舞人の近衛府の武官を先頭に加茂の社に行く時の描写で、当時の若い女性にとっては、今で言うなら人気絶頂のボーカル・グループに匹敵する憧れの的だったらしい。

（三）

前述したように、現代では蛮絵装束でも挿頭花を付ける舞は非常に少ない。「春庭楽・桃梨花・喜春楽」。挿頭花を付けるのは、春に関係のある舞だけになっているようだ。

挿頭花は意外に高価である。値段の事を書くのは少々はばかられるが、冠にこじんまりと付いている挿頭花一人前で数千円もする。しかし、挿頭花には絶対にホンコン・フラワーを使わない。ホンコン・フラワーの花は概して大き過ぎるし、花の色もきつすぎる。日本製のそれは、花は小さめで色も淡い感じである。それにもまして、やはり昔からの冠には昔ながらの日本の造花が似合うのである。

或る年の演奏会の時、丁度八重桜が満開だった。曲は「春庭楽」。たまには本物の花を挿頭花にしてみよう、という話になった。装束を着ける前に八重桜の小枝を採って冠に付ける。なんとなく新鮮な感じである。頭を下げたり首を振ったとき、花びらがはらはらと散ったら優雅で美しいのではないか、という意見が出て、花びらをわざわざ千切って冠と挿頭花の間に挟んだ。舞台に登り、舞が始まる。何か頭の上が気になる。舞人全員同じだと見えて気のせいか何時もと動きが違うようである。花びらを散らそうとして首の動きが大きめになる。一ひら、二ひら花びらが目の前に散ってゆく。平安の貴族の優雅さを実感したような満足感で舞が終わり楽屋に戻ると、管方からの評判は散々だった。「何かしおれた花にみえたなぁ」「色が薄くて何の花か判らない」「冠の漆が剥げて落ちたのかと思ったよ」花弁は照明の反射で薄黒く見えたらしい。観客の皆さんも本物の花を使ったと思った人は殆どいなくて、「古い造花を使ったのだろう」ぐらいの印象だったらしい。

装束と挿頭花の大きさ、装束の色彩と挿頭花の色との兼ね合い、これらを計算して数々の挿頭花を定めた先人達の創意と工夫の知恵にまたもや感服させられたのであった。

（『邑心』10号より転載）

（編集部より）

東儀俊美先生より、生前に『邑心』（邑心文庫刊）に発表しておりました原稿の転載の許可を頂き、また奥様よりも転載の許可をいただけましたので、今後も東儀俊美先生の原稿を掲載させていただきます。

（左写真　冠に挿頭花を挿し
春庭花を舞う東儀俊美先生。
写真・林陽一）

横笛唱歌考 3

芝　祐靖

徳川家の大政奉還により、京都から東京に遷都されますと、明治天皇は、古来の宮中儀式を重んじられて、明治3（1870）年に「雅楽局」を太政官の中に仮設しました。雅楽局は五辻小辨を雅楽長として、楽員は、京都方より、「多」「豊」「山井」「安倍」、南都方より「上」「辻」「窪」「芝」「久保」「奥」「東」、天王寺方より「薗」「林」「岡」「東儀」の三方の各家と徳川家楽人（江戸紅葉山）の「東儀」で構成されました。これによって、三方の楽所は事実上解体されたといえます。

雅楽局は設置とともに、演奏楽曲の撰定をしましたが、統一楽譜がないため、演奏や伝習に混乱が生じました。明治6年になると、統一楽譜作成が命ぜられ、丸3年の歳月を費やして、60冊余5千ページに渉る全雅楽譜が完成しました。古代歌謡（神楽歌、催馬楽など）と笙は京都方、篳篥は天王寺方、横笛は南都方のものを主体にしたと伝えられています。

楽道維新ともいえるこれらの作業は、音律や楽器にまでは拘わらなかったものの、奈良時代の雅楽寮設置や、平安時代の楽制改革に匹敵する特筆すべき出来事といえましょう。いずれも政府（太政官）の管掌のもとに行われていることに複雑なものを感じますが、雅楽の特殊性、それまでの経過、それぞれ当時の状況から止むを得ないことだったのでしょう。

明治選定譜の作成により、以後百余年の伝承はもとより、演奏統一の方向へ、多大な影響を及ぼしました。近年では日本各地の雅楽のほとんどが、明治選定譜による共通の音楽を奏するまでに至りました。

ただ折角の明治選定譜も、口伝を重視して、古来の記譜法を踏襲したため、音律や拍節の細部にわたる記述がなく、備忘録の域を出ませんでした。統一楽譜作成当時は、正しい口伝を行うことによって、雅楽の伝承保存は充分保たれると、細部の記録の必要を感じていなかったのでしょう。

しかし間もなく、思いもよらぬ事態が発生しました。それは、明治維新の西欧文明指向の波が、ついに雅楽局にまで及び、雅楽道の確立を目指して、発足したばかりの雅楽局伶人に、「欧州楽（西洋音楽）を伝習せよ。」という雅楽の存亡にかかわる非情な命令が下されました。伶人達は、家業でもある雅楽の伝承に加え未知の西洋音楽伝習という難事業にたずさわざるを得なくなり、これによって雅楽は少なからず犠牲を払わなければなりませんでした。東西音楽の同時伝習というオーバーワークや、その後の我が国の音楽事情の激変によって、残念なことに、今日となっては解決出来得ない、いくつかの問題が残されてしまったことは事実です。

明治選定譜編纂当時には考えられない状況の急変ですが、明治選定譜に今一つ、細部にわたる記録や、指示が記されていたならば、何か手懸りがつかめたのではないか、と身勝手なことを考えています。

ごく一部に、「口伝」が損なわれたとは言うものの、明治の雅楽人の努力により、横笛音楽は、その本質を失われることなく、「明治選定譜」とともに、膨大な量の口伝が現代に伝承されました。

今後の伝承を担う私達現代の横笛奏者は、これらの口伝を尊重し、唱歌を大切にし、旧例を尋ね、常により良い演奏を心掛けてこそ、次の世代への道標となり、先人の苦労に報いる道ではないでしょうか。

『モノローグ』

前号、前々号で、横笛音楽伝承の長い行程を、唱歌を中心に、知り得る範囲で記してみました。紆余曲折を重ねながらも、千二百年の伝承を可能にした陰の立役者、「唱歌」の功績を再認識していただけたでしょうか。

現代の世の中は様々な種類の音楽や騒音が氾濫しています。我々は自己防衛のために、音に対しての感覚を鈍化させざるを得なくなり、音色や音律についての判断力も低下してしまっています。より良い横笛音楽を奏するために、このようなときこそ、唱歌が重んじられるべきだと思います。

では次に現代に伝わる横笛音楽と唱歌の関係を、音律の面から少し詳しく記してみます。

第二部
『六調子と唱歌』

たびたび述べてきましたが横笛奏者には、唱歌の習慣が大切です。特に初心者の場合は、楽器学習の数倍の時間が、唱歌にあてられるべきです。唱歌の不十分な奏者の演奏や、指孔名（手付け）のみの演奏が、如何に合奏音楽を乱して、他の奏者に迷惑をかけているかを知るべきです。教える方も、習う方々も常に、唱歌の重要性を心にとめていただきたいと思います。

横笛の唱歌は、横笛音楽と異なる音律が付けられている場合がしばしばあり、一旦その旋律を忘れてしまうと、楽譜を見ても歌うことが不可能になってしまいます。

なぜこのようなことがおこなわれているのでしょうか。唱歌音律について、その概要を述べてみたいと思います。

先人の知恵で唱歌は、難しい音移行のある横笛音楽を、実にたくみな片仮名を用いて表現し、歌い易い旋律がつけられました。

といっても、細かく別けると、百数十曲にのぼる横笛楽曲のすべてが、単一音律によって歌われるのではありません。これらの楽

曲は、六つの調声「壱越調」「平調」「双調」「黄鐘調」「盤渉調」「太食調」のいずれかに属しています。そして、各調声の持つ音階で歌われるのですが、各楽曲には、それぞれ楽曲独自の個性があり、所属の調声音階以外の音が用いられていることもあります。

このため、唱歌音律を細かく知るためには、六つの調声の持つ音階と楽曲独自の旋律を心得なければならないわけです。

ここでは、第1段階の六つの調声とその唱歌音律について、少し探ってみましょう。

調声と唱歌の関係は多少複雑で、六調子の中に、調声通りの音律で唱歌されているものと、調声音の一・二音を変化させて歌われているものの二つに別けられます。

なぜ調声音を変化させて、唱歌するようになったかといいますと、平安中後期に、雅楽は貴族の間で流行した風俗歌の催馬楽や朗詠と合奏することが盛んに行われました。

これらの歌謡は、日本音律（都節）で作られていますので、唐古楽を踏襲した雅楽音律とは、合入れないものでした。しかし、篳篥、横笛など、割合自由に音律を変化させることのできる楽器は、歌謡の旋律に合わせて伴奏するようになり、また、この音移行が日本人の音感覚にマッチしたため、その後、雅楽曲の演奏にまで採り入れられるようになりました。雅楽の主旋律楽器である篳篥音楽の日本化は、その歌い易さも手伝って、他の楽器の唱歌にまで深く浸透し、長期にわたる唱歌の伝承を可能にしたといえましょう。現代の横笛唱歌も、雅楽の主旋律である篳篥の旋律を中心に歌い易く組み立てられているので、唱歌と器楽の音律に違いが現れてくるわけです。

六調子と唱歌

唱歌で歌われている音律を日本音名で、横笛で奏されている音律を指孔名で、篳篥も指孔名で、笙は合竹名で、調性（楽制改革後の雅楽律）は階名、唐古律（古代中国律）も階名で記します。参考のために西洋音名も付します。

「双調」

まず、調声と唱歌の音律が同じである「双調」です。

「双調」

笙合竹	篳篥孔名	横笛孔名	唐古律	双調々声	唱歌音律	西洋音律	
十	上	上	商	宮	双調	G	1
下							12
	一	五	宮	嬰羽	勝絶	F	11
乙	四	下	変宮	羽	平調	E	10
							9
凡	六	六	羽	徵	壱越	D	8
							7
比	凡	丁	徵	律角	神仙	C	6
一	工	中	変徵	呂角	盤渉	H	5
							4
乞	五丁	夕	角	商	黄鐘	A	3
							2
十	舌	上	商	宮	双調	G	1

双調は唐古律「仲呂均商調」で「呂」にあたります。

※「呂」・「律」は、唐古律の商調を「呂」、羽調を「律」として日本に渡来後に別けられたものです。

笙に勝絶（F）の保持音がないため止むなく「下」（下無＝F♯）で代用しています。笙のこの一音以外は実に整然と並んでいます。篳篥の楽器特性にも合致して奏し易いため、音律が変化されることなく、唱歌も調声保持音と同じに唱われているものの、古代中国音階のため、唱歌としては多少歌いにくい音律があります。

「平調」「盤渉調」

次に唱歌音律の日本化の著しいものとして、「平調」と「盤渉調」を見てみましょう。平調は唐古律「林鐘均羽調」で「律」、盤渉調は「太簇均羽調」で「律」です。

次ページの表によって見られるとおり、「平調」「盤渉調」、2調の唱歌音律には、調声にない「第二音＝変商」、と「第九音＝変羽」が現れて、調声音律と、唱歌音律に差があることが示されています。この「変商」と「変羽」が、前述の「催馬楽」、「朗詠」などの古代歌謡の影響によるものです。

ここに調整音律（笙）による音楽と、歌謡音律（篳篥）による音楽が同時進行するという、まことに奇異な現象が現れています。この異なる音律の同時進行を理論付けることは、とても困難なことなので、感覚的にとらえて記してみます。

「宮」「徵」「律角」の各音は、両音律とも固定されています。特に「宮」と「徵」は、旋律句の終止音に使われることが多いため、固定して安定感や音楽の「おさまり」を感じられるようにしてあります。「商」と「羽」の変化されるものの一例として、盤渉調「商」の場合、笙は調声の「正商」（C♯）、篳篥は「変商」（C）、横笛は「嬰商」（D）といった具合になります。笙（調声音）をはさんで、横笛は半音上、篳篥は半音下を奏していることが多く、このような音のぶつかりを雅楽では、「スレ」る、といいます。半音の音のぶつかり合いは、その一部だけを取り出すと聴

「平調」

笙合竹	篳篥孔名	横笛孔名	唐古律	平調々声	唱歌音律	西洋音律	
乙	四	〒	羽	宮	平調	E	1
							12
凡	六	六	徴	嬰羽	壱越	D	11
工			変徴	羽		C#	10
	六凡	丁			神仙	C	9
一	工	中	角	徴	盤渉	H	8
							7
乞	五丁	夕	商	律角	黄鐘	A	6
							5
十		上	宮	嬰商		G	4
下			変宮	商		F#	3
	上一	五			勝絶	F	2
乙	四	〒	羽	宮	平調	E	1

「盤渉調」

笙合竹	篳篥孔名	横笛孔名	唐古律	盤渉調々声	唱歌音律	西洋音律	
一	工	中	羽	宮	盤渉	H	1
							12
行乞	五丁	夕	徴	嬰羽	黄鐘	A	11
美			変徴	羽		G#	10
	上丁	上			双調	G	9
下	一	五	角	徴	下無	F#	8
							7
乙	四	〒	商	律角	平調	E	6
							5
凡	六	六	宮	嬰商	壱越	D	4
工			変宮	商		C#	3
	六凡				神仙	C	2
一	工	中	羽	宮	盤渉	H	1

きにくいものですが、合奏の流れの中にこれを聴くと、不思議に抵抗なくきこえ、かえって音楽に厚みと幅が生じてきます。

笙、篳篥、横笛が、調声通りの音楽を奏する「双調」の楽曲と、「スレ」のある「平調」「盤渉調」楽曲を比較してみるとわかることですが、双調楽曲は整然としすぎていて、音楽が単調に感じられ、「平調」「盤渉調」楽曲は音型に変化が感じられます。

これらの異なる音律の同時進行が、平安時代に意識的に行われたものかどうか、わかりませんが、もし意識して採り入れたものとすれば、斬新な発想であり、当時の雅楽人の音楽センスの良さと、レベルの高さが窺えます。

（つづく）

（『雅楽界』57号より転載）

「北陸雅楽大会」60余名が参加
8曲を残吹で大合奏

「北陸雅楽大会」が、5月31日、北陸地方の雅楽会、7団体から60余名が石川県加賀市の「かが楽」に集り開かれた。参加の会は、北陸の石川県、富山県にある澄音会、清婉会、雅城会、洽聲会、雅鳳会、和雅会、嘯鶴会の方々。

北陸の石川県と富山県だけで7つ以上もの会があるのに驚いたが、それだけでなく1年に1回、互いに研鑽と交流を深めるため、80年余り前から、それらの会が一堂に会して「北陸雅楽大会」を開催しているとのことで、取材させていただいた。

残吹　一返目は全員合奏、二返目は、一管通り

「北陸雅楽大会」の参加者は、昼過ぎより車に楽器や火鉢などを積んで続々と山代温泉の旅館「かが楽」に集まってくる。

午後2時、百畳の広さの大広間に鞨鼓、太鼓、鉦鼓、そして琵琶、箏は2面づつが置かれ、向かい合わせに各管それぞれ15名余りが座る。第一部は、双調、鳥急、武徳楽賀殿急、酒胡子の4曲、第二部は、黄鐘調拾翠楽、越殿楽、西王楽破、千秋楽の4曲、計8曲を演奏するというものだが、残吹という演奏方法で行われる。

残吹は、残楽とは異なるもので、一返目は通常のように笛の音頭で始まり、付所から全員合奏となる。二返目に入ると管は一管通り、絃と打物は全員での演奏となる。

残吹の演奏方法があることは聞いていたが、残吹を体験したのは初めてで、管方がそれぞれ15名余の計45名余、琵琶、箏、打物を加えると総勢約60数名で迫力ある合奏で一返目を演奏し、二返目は、残った人の一管通りの優雅な演奏に変わる、大広間にはゆったりした時間が過ぎていく。

この大会では、残って吹く人の決め方も昔からの方法ということで、あらかじめそれぞれの曲、鳥急は澄音会、武徳楽は清婉会、雅城会、洽聲会の合同でと決められていて、担当の会のメンバーが音頭をとり残吹もその方が演奏する。

5月31日に開催された「北陸雅楽大会」残吹で合奏

ですから曲が変わるごとに1列目に座る音頭の方は入れ替わる。都合で参加者の少ない会は、2団体、または3団体が合同して曲を担当する。参加のすべての会が第一部の双調曲の何か1曲を担当する。

休憩の間に次の黄鐘調のために琵琶、箏の調絃を変えて、第二部が始まる。

第二部も残吹である。黄鐘調の曲も、参加の会は、どれか一曲を担当する。そして各会は、双調の音頭とは別の人が黄鐘調の曲の音頭をされていた。ですから各会は一管通りでメンバーを変えて2曲を吹くこととなる。打楽器や絃楽器は、交代しない会が多いように思えたが、各会は、管楽器の計6名が一管通りの演奏を皆の前で演奏することになる。

60余名の迫力ある大合奏の後の一管通りの演奏は、この雅楽大会の為に研鑽を積まれてきた練習の成果が出されたすばらしい演奏であった。

80年以上前から毎年開催
北陸雅楽大会

この大会がいつから続けられてきたのかとお聞きした。「私が子供の頃は、やっていました」また他の方は「私が会に参加したときは開催されていた」と「開始時期の詳細は分からない」とのことでしたが、長老の方のお話では「戦前から開催されていたと聞いています。途中（戦中・戦後）の一時期中断があったようだが戦後すぐに再開したようです。私が子供だった頃は大会が開かれていました。大会の演奏のやり方も昔と同じです。」と。

残吹という演奏スタイルは、今から80年余り前から行われ、北陸の会7団体余が毎年雅楽の研鑽と親睦を深めるために開催し続けてこられ、準備の為の世話役は持ち回りで担当するという。

天保（江戸時代）から続く会も

参加の団体の名前は、それぞれ特徴があり、「○○雅楽会」などのような名称は付いていない。会の謂れを訪ねると「治聲会（こうせいかい）は江戸時代、天保元年1830年に結成されました。当時小矢部（おやべ）の人が、京都で雅楽を教わり地元に戻って教え始めたのが始まりと聞いています。それからですから180年の歴史を持っています。」と。また「和雅会（わげいかい）の名前は、親鸞聖人の和讃の中の詞から取られた名前です」。「澄音会（ちょういんかい）は、明治の初めに当時の宮内省の楽人の方が付けられた名前と聞いています。」と会の歴史もみな百年以上超えていて、名前もそれぞれに想いを込めて付けられているのが分かる。

もしかしたら残吹での「北陸雅楽大会」の歴史は、80年以上前からかとも思われる。

若い人、女性も増えて

参加の会は、寺院での法要のために結成され、現在まで僧侶の方を中心に続けられている会が多いように見受けられたが、最近は、一般の若い人や女性の方も増えてきているという。

第一部、第二部の演奏が終ると後片付けの後、懇親会がなごやかに始まる。古くからお互いなじみの会だからでしょう、遅くまで話しの花が咲いていました。　（鈴木治夫）

東日本大震災復興へ向けて
雅楽関係者の取り組み

3月11日、想像を絶する大きな被害に見舞われました。また放射能の被害は世界的な規模となってしまいました。

東北地方にも「雅楽だより」の読者の方が多数居られます。4月1日号の発送の時は、東北地方への郵便も発送できず、だいぶ遅れての発送となりました。幸いなことに東北地方に発送した「雅楽だより」が、返送されてくることはありませんでしたので、無事に届いたものと推測しております。

このような中、雅楽関係者の方々が、一日も早い復旧、復興を願っていろいろ活動されておりますので、こちらで分かりました情報と、復興支援の呼びかけを掲載いたします。この他にも活動されているかと思います。是非お知らせください。みんなで復興の支援と協力の輪を広げていきたいと願っています。

○神奈川雅楽部が
避難所へ炊き出しの支援

横浜で活動している神奈川雅楽部は、4月21日、28日、5月5日の3回、千葉県の避難所へ昼食の炊き出しの支援に出かけた。80人分のうどんが短時間で用意できるように大きな鍋3つとガスのボンベ、ガスコンロ、食材や果物、食器などなどバスに積み込み各回約10名とともに早朝に避難所に向かい夜になって帰るという支援を行った。

○復興支援チャリティー

・NPO法人「雅楽」では、4月23日、大阪三宮の生田神社で復興支援チャリティー雅楽演奏会を開催、観覧無料にして義援金を募り日本赤十字社を通じて被災地へ送った。

・東京楽所では、6月19日「雅楽の未来　奇跡の声明」の公演の売上げの一部を義援金として送った。

・雅楽Office Noriakiでは、4月23日（土）新宮神社（滋賀）、5月21日（土）葛西区民館ホール（東京）で三田徳明と雅楽瑞鳳会の出演による復興支援チャリティーの雅楽イベントを開催した。

○「東儀さん　雅楽で激励」
（5月17日夕刊読売新聞）

日本ユネスコ協会連盟スペシャルアドバイザーでもある東儀秀樹氏は、5月17日　宮城県気仙沼の小学校児童250人の前で雅楽などを演奏し、また子どもたちも笙などを吹いてもらい、明るい笑いに包まれた。読売新聞、写真入りで報道。

○復興への願いを込めて
毎日夜6時から越殿楽の奏楽を
伊藤えり（笙奏者）

3月11日に起こった東日本大震災、そして福島の原発の事故。毎日のように入ってくる悲惨なニュース。心の拠り所を雅楽の奏楽に求めるにも、都内とその近県は不安と混乱が蔓延、知人たちも不安で雅楽どころではない様子でした。計画停電や節電の影響で、笙のためのコンロを使うことさえ、はばかられるような毎日。

何か小さな事でも始めたい、という思いから「まずは個人レベルで、毎日夕方6時か

ら、平調の越殿楽を2行、それぞれがいる場所から祈りの気持ちを込めて吹きましょう」という企画をProject Etenrakuという名称のもとに開始し、自分のブログやメールで協力者を募りました。数日後には数名のかたから「心の支えになっています」というメールもいただき、名古屋や福井からもご賛同の声を頂戴し（是非とも、続けていきたいと思い）ました。また、「追悼の意」だけではなく、生き残ったわたしたちが、意欲を失うことなく、復興への道を踏み出そうという気持ちを込めたく、敢えて「盤渉調（ばんしきちょう）」ではなく、「平調（ひょうじょう）」の越殿楽（えてんらく）を選びました。

今回の震災を機に、国内外の音楽家がさまざまな形でコンサートを開き、また曲を作り、日本を励ましています。ならば日本古来からある「雅楽」を演奏しているわたしたちにも、できることがあるように思います。今後は、このProjectをきっかけとして、地域を越えた雅楽愛好家の交流が進めば、と考えています。

戦後、フランスの偉大なピアニスト、コルトーが来日した折に雅楽をご覧になり「地球上に、まだこんなものが残されていたのか」と感嘆され、そのことによって日本人が大いになぐさめられたそうです。

毎日、夕方6時に日本全国で越殿楽を奏でることで、今後のわたしたちの心の柱を築くことができれば、と切に願っています。よろしくお願いいたします。

詳細は伊藤えりブログ
http://sho3ku.cocolog-nifty.com/

YouTubeの映像は
http://www.youtube.com/watch?v=v5TsT5bZHJ8

文化交流使

真鍋尚之

私は日本を代表して世界にこのすばらしい文化を紹介する命を受けた。文化庁は、芸術家、文化人、研究者等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化や、日本と外国の文化人のネットワークの形成・強化につながる活動を展開している。私はこの文化交流使として5月14日ドイツベルリンに到着した。

すでに16日ベルリンより北に電車で2時間半ほど行ったロストックという町のロストック音楽演劇大学にて2回のレクチャーと演奏会を終えてベルリンに戻ってきた。ロストックのホールはとても素晴らしいところだった。13世紀築の建物の中のOrgel Saalでの演奏。とても良く響く会場で思う存分演奏する事が出来た。

演奏曲目は以下の通り。

渡辺裕紀子「an d ant e」（２００８）
盤渉調（ばんしきちょうし）調子
小櫻秀樹「N.A.M.I II」（２０１０）
湯浅譲二「原風景」（１９８８）
真鍋尚之「呼吸Ⅱ」（１９９８）
真鍋尚之「呼吸Ⅲ」（２００３）

私は1年間ドイツ・ベルリンを拠点に活動する予定である。ここを中心に長期滞在の利点を活かし、今までの短期でのレクチャーなどでは出来なかったより深い理解を得るための活動をする予定である。そのために武蔵野楽器様の御厚意でお借りした練習用の笙4管を持参している。

最近では雅楽を習う人もすぐに楽器を持って譜面をみて演奏するようになってきているが、ここでは譜面も運指図も五線も無い、越殿楽の唱歌に始まりなんの教材も用いない方法で教えるつもりだ。千年かかって先人が築きあげた習得方法はどんな新しいやり方よりお優れているに決まっていると私は信じる。今まで十年近く教えてきた共立女子大での経験をそのままここでも実践するつもりだ。

これからの活動は6月5日のアジアンアートアンサンブルとの笙と弦楽三重奏のための自作曲の初演をはじめ、5月28、29日のミュンヘン、ニュルンベルクでのソロ演奏など、各地での演奏を予定している。

そもそも、私は作曲家である。作曲の勉強をするために音楽大学に進んだ。しかし、子どもの頃からずっと「日本」というものに興味を持ち続けていた。何故日本人なのに洋服を着るのか？　何故日本人なのに西洋音楽ばかり勉強するのか？　何故日本人は自分たちの文化を評価しようとしないのか？　何故日本は外国の方が優れていて何かにつけて「欧米は」というのか？

私は常に日本人である事に誇りを持っている。クラシック音楽を勉強しているとしばしば日本人には西洋音楽を演奏する事が出来ない、とか、ドイツ語を話せないと「本当」のベートーヴェンを演奏する事は出来ない、なんて話をよく聞く。しかし、決して比べられるものでは無いのだが私は日本人が一番優れていると思っている。私はその優れた日本人としての曲を創るために雅楽の道へ進んだ。雅楽の演奏家になろうと思っていた訳ではないのだが。

たいていの音楽家はヨーロッパに本場の音楽を勉強しに行くが私はヨーロッパに「本場日本」の優れた音楽を紹介する為に行くのである。ロストックでの演奏会は爽快であった。現代音楽（クラシック音楽の中でもこの半世紀に書かれた前衛作品を言う）の演奏会ではあるが最初の曲からの聴衆の盛り上がりぶりは何とも表現しがたいものがあった。定期的にこの「雅楽だより」には寄稿して行こうと思う。

私にとってこの優れた雅楽を世界に紹介したい願望はずっと持ち続けていたが、ここにたどり着くまでの道のりは本当に長かった。次回はこの辺りにもふれ現地での活動とどう受け止められているのかについて報告していこうと思う。

宮中御神楽の図

葛飾八幡宮　神職
中村裕之

左上の写真の「宮中御神楽の図」は、縦79・5センチ、横7・8センチ、高さ7・3センチの軸箱に収められた掛け軸で、絵の部分は、縦44センチ、横57センチの大きさです。軸箱の表書きには、しっかりとした墨書で「王政復古之勲七卿之壱人澤宣喜（嘉と追書）卿之書画」とあり、その右側には少し小

さめな字で「文久三年銀山義挙主将時卿年拾六歳（二十九と追書）」とあります。

文久3（1863）年薩摩藩・会津藩などの公武合体派が画策した8月18日の政変で、尊王攘夷派の公家7名が失脚、京の都より長州藩に落ち延びた。俗に「七卿落ち」と呼ばれる7名の公家は、三条実美（権中納言27歳）、三条西季知（正二位行権中納言53歳）、四条隆謌（従四位上行侍従36歳）、東久世通禧（正四位下行左近衛権少将31歳）、壬生基修（従四位上行修理権大夫29歳）、錦小路頼徳（従四位上行右馬頭27歳）、そしてこの澤宣嘉（正五位下行主水正28歳）。

澤宣嘉は、天保6（1836）年12月23日に生まれ、この政変で長州藩に逃れたのちに但馬国の生野で挙兵するも敗れて、再度長州藩へ。明治2（1869）年新政府の外務卿となり外交に力を尽くすも明治6（1873）年9月27日、38歳にて病没。小石川の伝通院に墓所がある。

能書きはこのぐらいにして。この軸物はもともと私が購入したものではなく、知人が京都の古書店より購入したもので、知人はこうなることを予測したかどうかはわからないが、私に見せたのが運のつきとなった。好事家の押しに押し切られ、私のところに来た。

この絵は、作者の澤宣嘉卿が成人となって、宮中に参内して様々な行事に参列して、「御神楽の儀」も陪観して、この政変に巻き込まれるまでの間に書かれたものであろうし、時間をかけて丹念に調べていけばそのころの楽家楽人のアタリや、なぜ篳篥はないのか、またこの絵の配役を想像してゆく楽しみ方もあるというわけだ。

前号に掲載できなかった演奏会など

○2月、東京楽所がドイツ
ベルリン、デュッセルドルフ、フランクフルト、ヴュルツブルクで雅楽公演。

○小矢部市芸術少年団雅楽部門演奏会
2月13日(日)富山県小矢部市クロスランド
管絃　越天楽、雞徳　舞楽　陵王
演奏　治聲会

○3月3日、大阪楽所がベルギー・ゲンシ市ベイルーク音楽院の招きで同院ホールで雅楽公演。管絃　越天楽他、舞楽　陵王。

○雅楽の未来　奇跡の声明
6月19日（日）午後2時　5000円
東京オペラシティーコンサートホール
管絃　黄鐘調　越天楽残楽三返　声明
四智讃、唄　舞楽　陵王、納曾利　ほか
演奏　東京楽所

○第8回雅楽祭
6月19日（日）江島若宮八幡神社（三重）
神楽　人長舞　舞楽　蘭陵王　ほか

○十二音会第33回公演
6月23日（木）午後7時　紀尾井ホール
国風歌　久米舞　管絃　太食調　傾盃楽急
輪鼓褌脱　舞楽　陪臚

夏～秋までの主な雅楽演奏会など

燃水祭　近江神宮（滋賀）
7月7日（木）11時
舞楽　曲目未定
出演　女人舞楽原笙会
問合せ　℡0797—23—1886

のうのう七夕コンサート（東京）
7月7日（木）午後7時開演
矢来能楽堂　正面指定席6000円、その他指定席5000円、学生2000円
曲目　合歓塩一噌幸弘作曲「つの笛即興曲」
舞楽　還城楽　半能・高砂
演奏　観世喜正、一噌幸弘、中村かほる、石川高、八木千暁、中村仁美、伶楽舎
問合せ　℡03—3266—1020

きらほしの舞台（大阪）
7月7日（木）午後7時　一般1500円
大阪国際交流センター　学生1000円
舞楽　振鉾、北庭楽、狛桙、甘州、長慶子
演奏　雅亮会
問合せ　℡06—6641—0084（雅亮会）

博雅会関西雅楽公演vol・1『壱具』（兵庫）
7月8日（金）午後7時
兵庫県芦屋市文化センター神戸女学院ホール
前売2500円　当日3000円
管絃　五常楽壱具　朗詠　二星
舞楽　蘭陵王壱具
演奏　博雅会
問合せ　℡080—2415—2347
メール：gagaku_iwasa@yahoo.co.jp

文月会　雅楽演奏会（東京）
7月16日（土）午後2時予定　無料
赤坂コミュニティーぷらざ区民ホール
管絃　双調　新羅陵王急、酒胡子
舞楽　春庭花（一帖）、納曾利、登天楽
問合せ　℡090—1859—6962

夏祭　西宮神社「夏祭」（兵庫）
7月20日（水）午後7時30分、8時30分
舞楽　迦陵頻　厳島五常楽
出演　女人舞楽原笙会
問合せ　℡0797—23—1886

伶楽舎第十回雅楽演奏会（東京・四谷）
チケットプレゼント有り
応募方法は次ページ
7月22日（金）午後7時
紀尾井ホール全席指定
S4000円　A3000円　B2000円
管絃　壱越調調子、迦陵頻破（延只八拍子）・急　舞楽　蘇莫者　湯浅譲二作曲委嘱初演曲『ミュージック・フォー・コズミック・ライト』
音楽監督　芝祐靖　客演　薗隆博
問合せ　fax03—5269—2011
http://www.reigakusha.com

篝の舞楽　四天王寺（大阪）
8月4日（木）午後7時
四天王寺五重塔前庭
振鉾、春庭花、登天楽、還城楽、長慶子
演奏　雅亮会
問合せ　℡06—6771—0066

中元万燈籠　春日大社　直会殿（奈良）
8月14日（日）午後6時30分ごろ

舞楽　五常楽急　演奏　南都楽所
問合せ　℡0742―22―7788

雅楽月見の宴　一の宮海岸（千葉）

8月14日（日）午後6時40分ごろ
管絃　平調音取、越天楽、林歌、盤渉調音取、越殿楽、白柱
演奏　玉前雅楽会・東葛雅楽会
問合せ　℡0475―42―2711

京都文化絵巻　下鴨神社（京都）

8月27日（土）（雨天順延）夕方より
御神楽　舞楽　声明
出演　平安雅楽会

ハワイ大学音楽部雅楽コース
創設50周年記念演奏会（ハワイ）

8月27日（土）午後7時
ハワイ大学オービス講堂
神楽舞　大和（作曲・作舞　社本正登司）
管絃　太食調　輪鼓輝脱　平調　越天楽残楽
三返、舞楽　落蹲、抜頭　ほか
演奏　ハワイ雅楽研究会ほか

観月祭　伊勢神宮　内宮神苑（三重）

9月12日（月）夜
管絃　皇麞急　舞楽　胡蝶
問合せ　℡0596―24―1111

名月管絃祭　下鴨神社（京都）

9月12日（月）午後6時
舞楽　蘭陵王
出演　平安雅楽会
問合せ　℡075―781―0010

仲秋管絃祭　日枝神社（東京）

9月12日（月）午後6時
曲目　管絃　黄鐘調　海青楽　拾翠楽ほか
問合せ　℡03―3581―2471

中秋管絃祭　来宮神社（静岡）

9月12日（月）午後6時
舞楽　還城楽　ほか
問合せ　℡0557―82―2241

放生会舞楽　石清水八幡宮（京都）

9月15日（木）午前8時、10時
舞楽　胡蝶、蘭陵王、納曾利
出演　平安雅楽会
問合せ　℡075―981―3001

能と雅楽…延命長寿への憧れ（東京）

チケットプレゼント有り
応募方法は左記へ

9月21日（水）午後6時
9月23日（金）午後2時
国立能楽堂　6100円、4700円ほか
21日　管絃　海青楽、能　寝覚
23日　朗詠　春過、能　彭祖
予約開始　8月9日（火）10時より
問合せ　℡0570―07―9900

秋季神楽祭　伊勢神宮　内宮神苑（三重）

9月22日、23日、24日各午前11時
晴の時は午後2時もある
舞楽　迦陵頻　狛桙
問合せ　℡0596―24―1111

永光寺開創七百年記念　雅楽の調べ

9月24日（土）午後6時半　1000円
永光寺（石川県羽咋市）
管絃　越殿楽残楽三返　他
舞楽　蘭陵王　演奏　萌雅会
問合せ　℡0767―26―0156

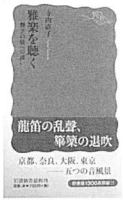
★★読者チケットプレゼント★★

☆伶楽舎7月22日（金）紀尾井ホール（東京）
5名様ご招待
7月9日必着　招待券を送付
☆国立能楽堂　能と雅楽
9月21日、9月23日　各2名様ご招待
9月5日必着　招待券を送付

応募資格・「雅楽だより」定期購読者
応募方法・はがきに希望の演奏会、住所、氏名、電話番号など必要事項を記入。
応募先・〒188―0013
東京都西東京市向台町6―12―6鈴木方
「雅楽だより」編集部

新刊本など

○『雅楽を聴く―響きの庭への誘い』
寺内直子著　岩波新書　3月刊720円＋税
京都、奈良、大阪、東京それぞれの「雅楽の庭」にふさわしい音風景が紡ぎだされている本。初心者もベテランもお勧め。



○DVD「雅楽入門　五常楽にチャレンジ」
発売元・FEIRecord 約140分、2500円
篳篥、笙、龍笛それぞれの楽器の特徴や扱い方の丁寧な解説から、五常楽急の唱歌、指使い、そして合奏と練習用カラオケ（マイナスワン）も、合奏は他に越天楽、陪臚も収録。
取扱い　℡03―5902―7281
（武蔵野楽器）

○雅楽展示「源氏物語を音で読む」（東京浅草）
7月より、大人300円、子ども150円
宮本卯之助商店太鼓館（東京）
午前10時～午後5時　休館日　月・火曜日
問合せ　℡03―3842―5622

寄付のお願い

ご協力いただける方、寄付をお願い致します。お振込は、購読料の口座へ、通信欄に「寄付」とご記入ください。

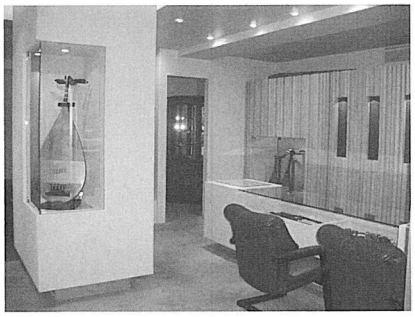
「雅楽だより」
購読・継続　申し込み方法
購読料一年（4回発行）千五百円。（送料込）

郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、
［口座番号］00140―5―614032
［加入者名］雅楽協議会
までお振込みください。ご記入頂いた住所に「雅楽だより」を送らせて頂きます。数年分まとめての振込みも受け付けています。

あとがき

東儀俊美先生のご冥福をお祈りいたします。追悼のお言葉を掲載させていただきました。雅楽協議会のホームページを再開しました。
http://www.gagaku-kyougikai.com/

「雅楽だより」第26号
2011（平成23）年7月1日
発行　雅楽協議会
編集　雅楽協議会　「雅楽だより」編集担当
連絡先　〒188―0013
東京都西東京市向台町6―12―6（鈴木治夫）
TEL・042―451―8898
FAX・042―451―8897
メール　gagakudayori@yahoo.co.jp
http://www.gagaku-kyougikai.com/
印刷　秀英堂紙工印刷株式会社


新しく改装された武蔵野楽器店
㈱ 武蔵野楽器
℡ 03-5902-7281　Fax 03-5902-7282
〒114-0003 東京都北区豊島 1-5-6